



黒岩探訪

たんぼう

34

KUROIWA
くろいわ

黒川小塚遺跡 — 弥生時代のお米 —

夏休み中、富岡市立美術博物館において、富岡中、西小、黒岩小3校合同の職員研修で、富岡校区の文化財について話をする機会がありました。本美術博物館の二階には、郷土資料展示室があります。この展示物に、関係について話しました。

- 一 黒岩出土のオオツノシカの化石骨
- 二 弥生時代の黒川小塚遺跡
- 三 西小校庭出土の富岡五号古墳の埴輪

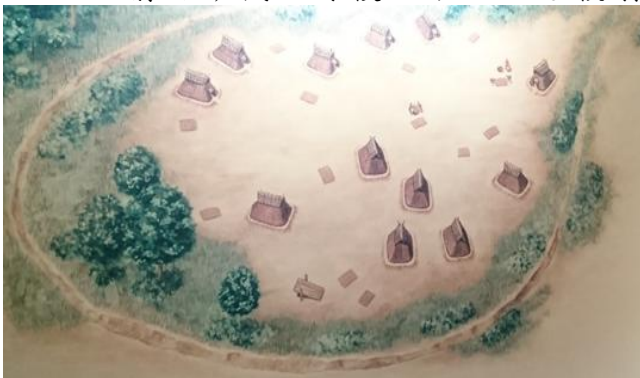
今回は、黒岩小校区ではありませんが、黒川小塚遺跡を紹介したいと思います。遺跡の場所は、二五四バイパスの跡の平公園入口の信号付近です。この遺跡は昭和59年のバイパス建設、その後の周辺店舗建設時の発掘調査で、弥生時代中期後半、古墳時代前期の遺跡であることがわかっています。昭和59年の調査では、弥生時代中期の七軒の竪穴式住居跡と十二基の

土坑（どこう）が発見されています。土坑の内、八基は長辺二m×短辺一mの隅が丸い長方形をしていて、貯蔵用の穴です。このうち数基の土坑から埋まっています。土に混じって炭化した多量の稲粃が発見されました。おそらく住居と一緒に火事にあい、貯蔵しておいた稲も炭になってしまっ

たものと考えられています。この発見された稲粃（お米）は展示されていて、市文化財保護課で保管しています。これも調査対象の一つとして、数年前、弘前大学人文科学部が東日本出土の稲粃を科学的に調べ、『日本の出土米』弥生時代から中世までの全国で出土した米の形態・DNA分析調査報告（2012）で報告しました。これによると放射線炭素年代測定という最新技術で検査したところ、この稲粃の推定年代は「紀元前一七五〇年〜紀元前一五五〇年」とされています。つまり紀元前一九五〇年、紀元前一五五〇年という

ことです。黒川小塚遺跡は、弥生時代中期後半に防衛的な溝を集落の周囲にめぐらせた環濠集落としても知られています。出土土器の様式から弥生時代中期後半とされています。はつきりした西暦年をいうのは難しい問題ですが、今回の報告でおよそ紀元前二世紀と分かりました。現在では、稲作は縄文時代晩期にはあったと考える説が有力になりつ

つあります。弥生時代には、一般に稲作は弥生時代に広まったとされています。西日本から移動してきた弥生人は、今の長野県から内山峠を越えて甘楽の地に人々がどこで稲作をしようかと適地を探したはずで、そんな時に高田川と丹生川が合流する付近を目にした時、おそらくここにしようと考え集落を造ったものと想像します。そんなことを想像するも楽しいことです。この遺跡の稲粃（お米）は群馬県内の稲作開始を示すものではありませんが、少なくとも富岡市において紀元前から稲作が行われていたことを証明する貴重なものです。



↑ 黒川小塚遺跡想像図
（市美術博物館）
← 黒川小塚遺跡の稲粃
（市文化財保護課）